

# 燈光



# 第十管区海上保安本部設立60周年を迎えて

第十管区海上保安本部交通部長 久保

剛

第十管区海上保安本部は、昭和37年1月1日、当時、山口県から鹿児島県奄美群島までの広大な海域を管轄していた第七管区海上保安本部の業務量増加に伴い、地域ニーズに対応したきめ細やかな海上保安行政の展開を図る必要性から第七管区海上保安本部を二分し、新たに熊本県、宮崎県及び鹿児島県の南九州の全域を管轄する海上保安機関として設立し、本年1月1日をもって設立60周年を迎えました。

当管区60年の交通行政を振り返ってみますと、昭和37年当時の管内の航路標識基数は120基程度（現在は377基）で、航路標識の密度（沿岸線100海里あたりの基数）は全国平均の2分の1以下に過ぎず、「暗い海」の解消が望まれていました。

当時は、高度成長期にあり、海運業界、漁業活動の活発化による海上交通量の増大に伴い、管内の港湾航路等の整備が進展し、通航

船舶の安全確保を図るため、航路標識の整備の必要性が高まり、「暗い海」を解消するため、沿岸灯台やその他主要な港湾に次々と新しい標識の整備が進められました。

一方で、航路標識を管理する航路標識事務所の集約も進められました。鹿児島にあっては、昭和37年に灯



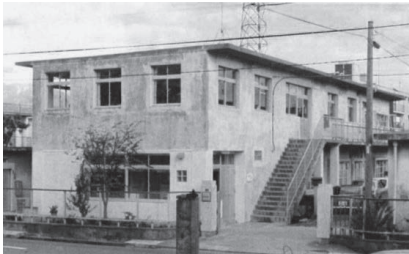
笠利埼灯台 (奄美) S37.3 設置



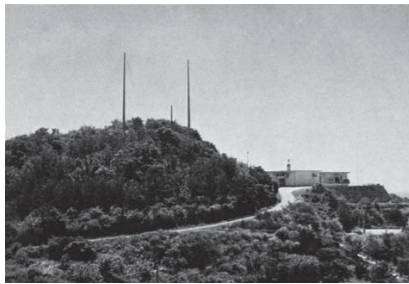
喜志鹿埼灯台 (種子島)  
S38.3 設置



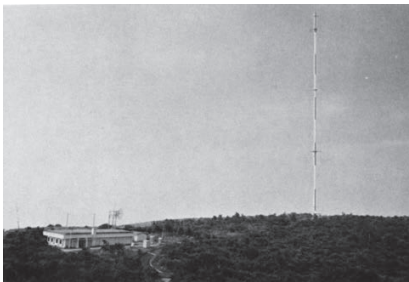
初代 ずいうん S37.12～S58.6



鹿児島航路標識事務所 S38.8 集約



野間池ロラン局 S41.5～H9.5



長島デッキ局 S44.5～H11.3

台見回り船「ずいうん」が配属され、佐多岬、屋久島、種子島の各航路標識事務所を鹿児島航路標識事務所に集約することにより、離島や僻地で勤務する職員の生活環境が改善されました。また、定期的に灯台見回り船や用船、業務用車両を使用して巡回点検を行うなど業務の効率化が図られました。

昭和40年代は、航路標識の種類も従来の沿岸灯台等の光波標識に加え、地上系の電波航法システムとして、ロラン局、デッキ局等の電波標識が整備されるようになりなりました。

昭和50年代は、新技術が次々と導入され、太陽電池

を電源とした沿岸灯台の設置、ハロゲン電球、有線監視装置、船舶気象通報の自動化等により、省力化が図られるとともに、機器の信頼性が向上しました。また、レーダー搭載船の増加に伴い、都井岬ほか4箇所に船舶のレーダー画面上に点線で岬等の方向を表すレーマーカービーコン局が整備されました。

昭和63年には、灯浮標や灯標の意味・様式を定めた「浮標式」が世界的に統一されたことに伴い、全国的に改修工事が行われ、当管区においても3ヶ月間に77基の航路標識の工事が行われました。

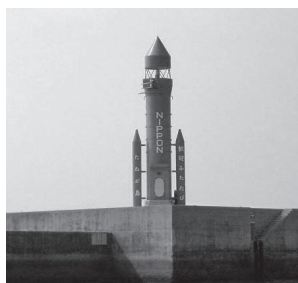
そして平成に入ると、港湾、航路の整備の進捗、船



屋久島灯台 R 3.6 登録有形文化財  
明治期灯台 (Bランク)



鞍崎灯台 H31.3 登録有形文化財  
H20 近代化産業遺産 明治期灯台 (Aランク)



西之表港沖防波堤北灯台 H10.11 設置  
(H-II型ロケットをデザイン)



伊延港導灯 H 6.3 設置  
(ユリの花をデザイン)

船交通の輻輳化、船舶の大型化・高速化等による海上交通環境の変化に伴い航路標識も多様化が要求されます。一方歴史的、文化的価値のある灯台の保存やデザイン灯台の整備も進められ、地域のシンボルとして現在も親しまれています。

平成9年からは、ディファレンシャルGPSの運用が開始され、当管区でも都井岬と中之島の2局で運用が開始されました。一方、デッカ、ロランAなどの電波標識は、利用形態の変化や国際事情等からその幕を閉じることになります。

平成13年からは、管内の航路標識事務所の統合が始まり海上保安部に航行援助センターが発足し、「沿岸域情報提供システム(MICCS)」(現在の「海の安全情報」)の運用も開始されました。

平成15年から組織が灯台部から交通部となり、平成19年には管内全海上保安部の航行援助センターが保安部交通課へと変遷していきまし。平成21年には当管区にもAIS陸上局が整備され「鹿児島船舶通航信号所」の運用が開始されました。

現在、管内の航路標識は、省エネ・エコロジ



沿岸域情報提供システム H13 運用開始



都井岬ディファレンシャルGPS局  
H10.4～H31.3



草垣島灯台 H15.12 太陽電池化



鹿児島船舶運航信号所 H21.7 運用開始



H31.3 登録有形文化財  
九州唯一の参観灯台  
都井岬灯台 H16.3 滞在解消

1化への整備が促進され全体の約9割はLED化、太陽電池化されています。  
その一つである草垣島灯台は、薩摩半島の西南西約90kmの東シナ海に位置する無人島で、電源は、発電機を運転し、年間ドラム缶約50本の軽油を使用していたため、燃料補給や保守点検が困難でしたが、平成15年に当時日本最大の太陽電池灯台に生まれ変わりました。  
こういった技術の進歩により、保守管理体制も様変わりし、滞在勤務も平成16年3月の都井岬灯台を最後にすべて無人化となっています。

平成21年度から保守業務の民間委託化も開始されました。

近年では、平成31年3月に宮崎県の3灯台（都井岬灯台、鞍埼灯台、細島灯台）及び令和3年6月に屋久島灯台が国の登録有形文化財に登録され、今後、さらに地域の観光資源として活用が期待されます。

終わりに、当管区本部発足後、今日まで60年間に於いて、交通行政を担う我々の組織、業務内容は大きく変貌しました。この間、沢山の先輩諸氏の熱い思いと真摯な努力によって、南九州の海の安全、安心を守る精神が今日に受け継がれ、当管区本部発足60周年を迎えたことに心から感謝いたします。

今後も当管区は、灯台守の時代から引き継がれる海難を起こさせないための努力を重ねると同時に、灯台が地域活性化に貢献していくように、業務を進めていきます。



細島灯台 H31.3 登録有形文化財  
恋する灯台

## 令和4年 入道埼灯台参観開始について

★入道埼灯台は下記の通り参観いたします★



参観期間 令和4年4月1日(金)～  
令和4年11月6日(日)

参観時間 9時～16時

※4月1日～10月15日 土日等は  
9時～16時30分

灯光会入道埼支所 ☎ 090-1931-9706



入道埼の参観状況

※尻屋埼灯台につきましては、参観開始の時期が決まり次第、あらためてお知らせいたします。

# 旧安乗埼灯台を後世に伝えるために

鳥羽海上保安部次長 藤島 充良



## 1 はじめに

安乗埼灯台は、昨年、旧安乗埼灯台起工日から150年を迎え、同11月3日の安乗埼灯台無料公開においては、約600名の来訪者がありました。目玉として、「船の科学館」(東京都品川区)の小堀様から旧安乗埼灯台の貴重な写真を提供いただいたものを展示し、来訪者に見ていただく企画は好評で、メディアにも大きく取り上げられました。

また、先般、海上保安試験研究センター(東京都立川市)の渡辺企画調整官から、安乗埼灯台に係る重要な史料となる図面を譲っていただきました。それは、昭和30年代頃に描かれたものと思われる旧安乗埼灯台と現安乗埼灯台建設時に描かれたと思われる青焼図面でした。

旧安乗埼灯台の図面は、第四管区海上保安本部交通部整備課において青焼図面が保管されており、昨年9

月29日にツイッターにて提供いただきましたが、残念ながら判読不明の箇所が多い状況でした。今回、同センターから提供いただいた図面は、原図から直接コピーされた現物であり、線画・寸法がはっきり読み取れる保管状態が大変良い図面でした。安乗埼灯台は、登録有形文化財に登録されており、将来、重要文化財指定に有力な歴史的灯台ですので、旧灯台図面を当部が保有することは重要な意味があります。

今回、提供いただいた図面は、今後、旧安乗埼灯台を語る上で貴重な史料となり、広く知っていただくために、旧安乗埼灯台図面をCADにて完全復元し、活用することとしました。

以下、本誌をお借りして、CADにて復元した図面と「船の科学館」から提供いただいた貴重な写真を紹介させていただきますと思います。

## 2 旧安乗埼灯台図面復元

渡辺企画調整官によれば、「同センターは、昭和47年（1972年）のセンター開設から今年5月1日で発足から50周年となることから、同センターが保有する資材や資料の確認・整理を行っていたところ、旧安乗埼灯台及び現安乗埼灯台に係る古い図面を発見した。」と小職に電話があり、「安乗埼灯台の図面を里帰りさせて鳥羽保安部で有効活用してほしい。」とのご配慮にて譲っていただけることとなりました。

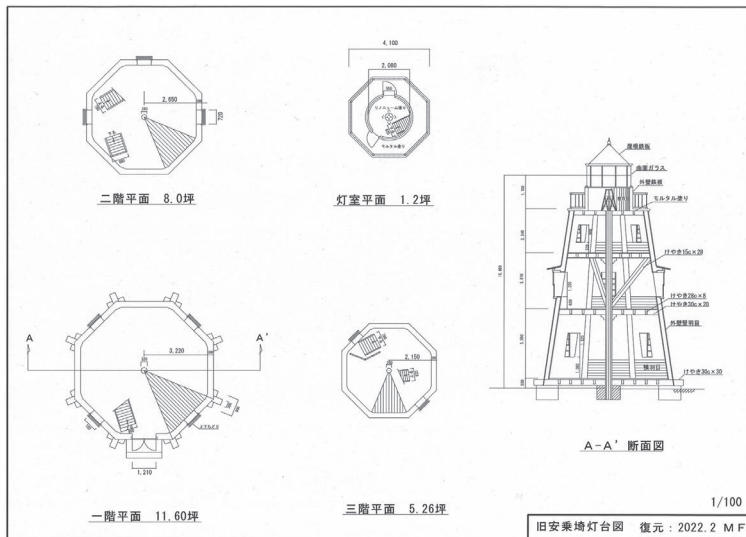
旧安乗埼灯台の図面は、1階、2階、3階及び灯室の平面図並びに断面図がB2用紙に縮尺1/50にて描かれていました。

旧安乗埼灯台図面は、同センター前身の「灯台局工務課工場」（横浜）時代の昭和30年10月から昭和47年まで試験灯台として旧安乗埼灯台が、旧第三管区海上保安本部敷地内にあった頃に描かれた図面であると推測しています。

また、現安乗埼灯台の図面には、「昭和22年7月5日」の記載があり、現在の灯台建設時の設計図面であると考えられます。

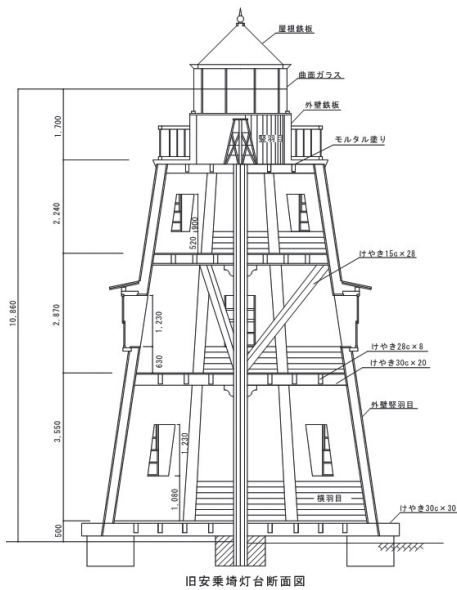
特筆すべきは、旧安乗埼灯台図面裏側に、当時の技

術者が現場測量したものと思われるメモ書きされた灯台入口屋根と扉の寸法入りの図が描かれており、詳細構造を知る有力な手がかりとなりました。



旧安乗埼灯台図（図一1）

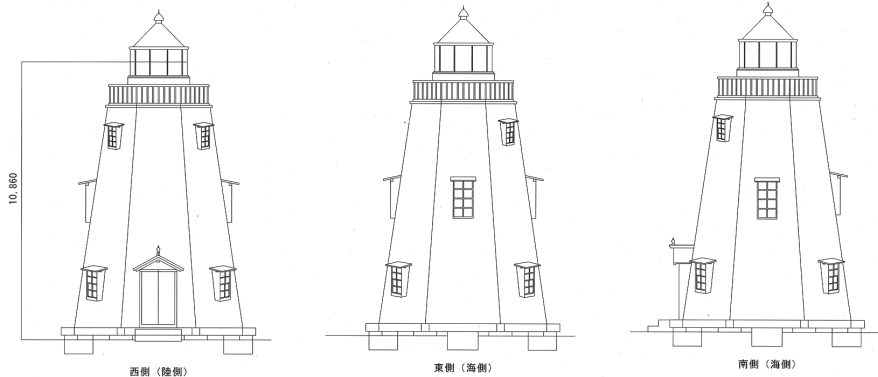




旧安乗埼灯台断面図

旧安乗埼灯台断面図拡大 (図一2)

CADにて復元した旧安乗埼灯台は、図一1及び図一2のとおりで、これを元に旧安乗埼灯台の姿を図一3のとおり正確に再現することができました。昨年、小職が再現した旧安乗埼灯台姿図は、写真から寸法を割り出しており、写真撮影が地上から撮影されたものであることから、当然ながら上部に行くほど少しスリムになっていたのを今回修正することができました。なお、裏面に描かれたメモ書きから入口屋根根部に当時の設計者が、お洒落な意匠を施してあるのが判明し、設計者のプライドに息をのみました。(図一4)



西側 (陸側)

東側 (海側)

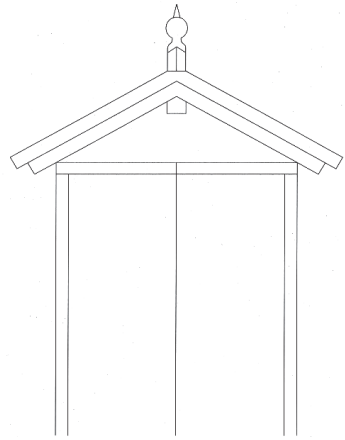
南側 (海側)

旧安乗埼灯台姿図 (図一3)

### 3 「船の科学館」提供の貴重な写真

昨年10月8日に「船の科学館」から旧安乗埼灯台の貴重な写真を提供いただき、昨年11月3日実施の安乗埼灯台無料公開において、安乗埼灯台資料館に同写真を展示させていただいたところ、新聞2社による事前広報もあり、来訪された方が興味深く見ておられました。また、当日のNHKのニュース放映においても、各移転先での旧安乗埼灯台の未公開写真が長時間にわたり取り上げていただきました。

旧安乗埼灯台は、昭和22年に撤去され、昭和24年5月に浜離宮恩賜庭園（東京都中央区）に移設、昭和30



入口屋根部（図—4）



写真—1



写真—2

年10月に旧第三管区海上保安本部敷地内（横浜）に試験灯台として移設し、昭和47年に「船の科学館」に移設されています。「船の科学館」は、これら移転先での珍しい写真を保有しており、提供いただいた写真を以下に紹介させていただきます。

#### (1) 安乗埼にあった頃の写真

写真—1は安乗埼にあった頃の旧安乗埼灯台で、南側から撮影された写真は珍しく、解像度も良く、レンガ造官舎の模様が良く分かります。明治6年から昭和22年まで現役で使用されました。

(2) 浜離宮恩賜庭園に移設された頃の写真

写真―2、写真―3は、昭和24年5月から昭和30年10月まで浜離宮恩賜庭園に移設された写真で、外壁が豎(たて)羽目になってるのが分かります。また、入口左側の出窓が、1個なくなっただのが分かります。(図―1の一階平面図参照)



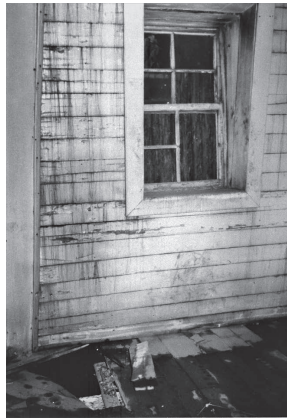
写真―3

(3) 試験灯台(横浜)時代の写真

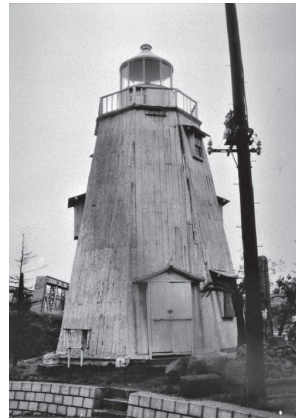
写真―4は、旧第三管区海上保安本部敷地内に試験灯台として移設された頃の写真で昭和30年10月から昭和47年まで横浜にあった際の写真です。外壁は、豎羽目で、入口左側の出窓がないのが確認できます。写真―5から写真―7は内部の状況で、写真―7は心柱の状況が良く分かります。



写真―6



写真―5



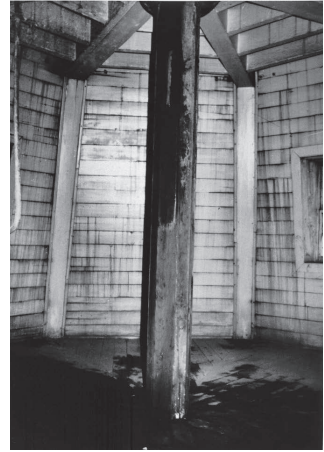
写真―4

(4) 「船の科学館」への移設の写真

写真―8は、「船の科学館」に移設中の写真で、灯塔が鉄骨に変更されています。また、写真―9から外壁が横羽目に変更されています。写真―10の入口扉部はオリジナルで、写真―11により内部の鉄骨造りの状況が良く分かります。



写真―8



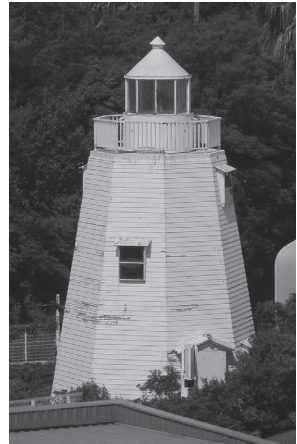
写真―7



写真―11



写真―10



写真―9

## 4 おわりに

今回、海上保安試験研究センター及び「船の科学館」から提供いただいた貴重な資料のおかげで、旧安乗埼灯台に係る歴史の深堀ができました。

小職は、廃止等された灯台をペーパークラフトにて再現する機会が4回あり、毎回不思議に思うことですが、貴重な資料や写真が自然と舞い込んでくるような気がしてなりません。もちろん灯台に関するアンテナは一般の人より高いとは思いますが、小職に発見されるよう何か待っていてくれるような不思議な縁を感じます。

また、同センターの渡辺企画調整官が「同センターは、今年開設50周年ですが、旧安乗埼灯台が「船の科学館」に移転されてからも今年でちょうど50年ですから、何か縁がありますね。」とおっしゃられた際には感慨深いものがありました。今回の件は、企画調整官とのチャンネルがなければ成し得なかつたものであり、歴史的史料を提供いただいたことに深く感謝いたします。

— 明治の灯台の話 (68) —

ひやつかんしま

## 百貫島灯台

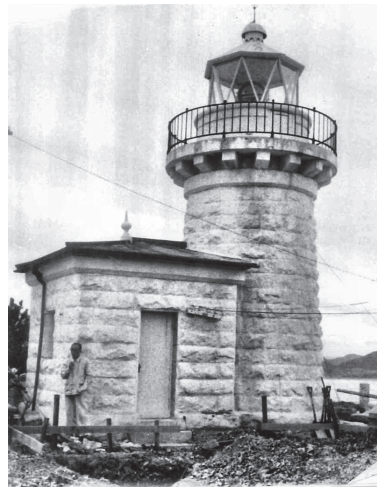
灯台研究生

百貫島灯台での仕事

百貫島灯台は、愛媛県最北端の孤島「百貫島」の頂上に立つ石造の灯台です（写真1）。点灯開始は明治27（1994）年5月15日、三原瀬戸の他の明治期灯台と同じです。明治27年の通信省告示第百五号の点灯の告示は次のとおりです。

### 百貫島燈臺

- 一 該燈臺ノ位置ハ 愛媛県伊豫國越智郡百貫島ノ山上ニシテ 北緯三十四度十七分五十八秒 東経百三十三度五十六分十七秒に當ル
- 一 該燈臺ハ 石造圓形ニシテ白色ニ塗り 第五等回轉白色ノ燈明ヲ設ク 其高サ基礎ヨリ燈火マデニ丈五尺（約7・6メートル）ナリ
- 一 該燈火ハ 二十秒時毎ニ一閃光ヲ發シ 全度ヲ照ス



写真—1 百貫島灯台  
（昭和37年3月  
第六管区海上保安本部保管写真）

- 一 該燈火ハ 水面ヨリ高サ二十四丈（約73メートル）ニシテ 其光達距離ハ晴天ノ夜十六海里（約30キロメートル）トス

点灯開始当時、百貫島には2名の灯台職員が家族とともに生活し、仕事は夜間当直のほか、4時間毎の氣象観測と付属の短艇により大浜埼灯台と長太夫灯標を巡回保守していたことが、尾道海上保安部に保管の灯台経歴簿と当時の氣象月報等から確認できます。

点灯開始4年後の明治31年の百貫島灯台の様子が、当時勤務した萩原賢造氏（ペンネーム相模太郎）により、燈光昭和11年8月号の回想記事「回顧片々六十年」

に次のとおり記されています。

初めての燈臺守生活百貫島灯台は、瀬戸内海ではあるが頂上に漸く二人詰官舎、小使（水夫）室とを置くに足る小さな島で、何れへ向かっても人家の有る處へは海上三哩以上である。生れ故郷より十里以上出た事のない僕が遠い他國の孤島に独身生活は淋しくないことはなかった。四日毎に交代で立標整理に出張して糸崎に寄港するのが何よりの楽しみであった。其頃の糸崎は松濱と呼び帆船の潮待ち港で、僅々三百



図-1 百貫島灯台周辺図

位の片側町で、重なるものは売春婦屋であった。沢山の女共を小船に積んで碇泊船に卸売して行く状況は、世間見ずの僕には珍しかった。

当時の大浜崎灯台と長太夫灯標は、揮発油昼夜灯器を使用しており、給油と燈心の清掃のため3〜4日毎の頻繁な保守点検が必要でした。この点検のため百貫島灯台には短艇が配備され、この短艇の水夫として、出島力松（明治27年5月15日雇）と小林倉作（同年6月3日雇）の2名も、百貫島に灯台職員と共に住んでいたことが同経歴簿に記載されています。萩原賢造氏は、両氏との保守点検のエピソードも、燈光昭和11年11月号の「回顧片々六十年（承前）」に次のとおり記しています。

百貫島では、立標出張と飲料水運搬の為、倉作、力松の二人の水夫が居た。倉作の方は六十近い爺で昔親船の船夫で、津々浦々で草相撲を取ったとか五尺六七寸骨太の大男、一癖ある爺で、前首員堀氏（初代首員堀初之助）が、本所から老年では不可であると云ふのを特に採用したのであるから其働き振りを見せてやれと言はれ、視察船から荷上の時セメントの大樽を背負

って皆を驚かしたとは彼の自慢話の一つであつた。僕が始めて出張した時、長太夫に上つて火口を取替へ點燈すると傍に居た倉作爺、旦那そげんことをしたのでは駄目だ、此の前も××さんが俺の云ふことを聞かず、そげんことをして発煙させ真黒にしてしまった、俺がやると云ふので、それなら爺や一つ頼むと言へば彼得意になつてやり直した。八ツ手の葉のやうな大きな手で仲々器用だ、石綿燈心の取付もうまい、曰く「立標の方は、爺お前がやれと言へば俺がやる、旦那は後でよく検査をするだけで手を汚さなくつてもよい」彼は上手に使へば、結構役に立つが時折飲ませぬとねじくれる。力松はズツ

ト年下の四十男だが、名は體をなきず力も弱い、終始倉作の頭使に甘んじて居るお人好しであつた。或時、力松が一寸トモ艦を取つた處、平素トモ艦を握つて船頭然たる倉作爺、



写真一 長太夫灯標の点検風景  
(燈光大正6年12月号掲載写真)

早速臍を曲げた。態と鼻唄まじりでワキ艦を操りながら船を目的地向けさせない、力松があらん限り力漕しても如何ともすることが出来ない、逆風を縫航り損ねた帆船のやうに一左一右船は少しも前へ出ない、力松は遂にヘトヘトになつて降参した。此意気地なしめ何處へママを喰つたか、と捨て臺詞でトモ艦を取返し意気揚々たる處、彼も又左程悪い人間でもないらしいつた。

鍋島灯台の拙稿(62)で紹介した波節岩灯標の看守人「長尾二郎」氏と同様、門前の小僧習わぬ経を読むが如く、灯器の取扱いは新米の職員より常駐していた水夫が卓越していたようです。

百貫島灯台は当時、5等級6面レンズを回転させ、20秒1閃光の灯台でした。回転の動力は分銅の揚げ降ろしによるもので、灯塔内の分銅筒の高さが6メートル弱しかないため、1時間45分毎に約100キログラム(鉄棹を含む)の分銅を巻き上げていた記録が灯台経歴簿に見られます。大正11年には回転機械分銅装置の改修により、時間は約2倍の3時間20分に延長されますが、100キログラムの分銅を夜間繰り返し巻上げる作業はやはり重労働でした。また、巻上げ中は回



転（灯火）が停止するため、これを懸念して百貫島職員「溝口諒司」氏が、燈光大正15年4月号に「不完全なる回転機械に就いて」と題した陳情記事を次のとおり記しています。

本臺の回転機械はと見るに極めて不便にして、改良の急務なるを認むる。即ち分銅捲上げ中に殆ど回転停止し不動灯となるのである。然して分銅の重量二四二ポンドおよそ約三十貫なほなれば、如何に馬力を掛けても其捲上げには五十秒乃至一分時間を要するのである。然して是を一気に捲上げるには、かなりの努力を要する事勿論である。又回転接続時間と言へば僅かに三時間なほされば短夜なれば三回乃至四回、長夜なれば五回乃至六回は如何にしても閃光燈なほ忽ち變じて不動燈となるのである。自分等の伝習中是不幸にも回転機械に就いては一指だも染めざれば、如何にすれば分銅捲中の回転停止を防禦ぼうぎょし得るかといふ事に就いては少しも知識がないのである。然して吾等は毎夜こゝうした事を見ては、人知れず心を傷めて居るのである。

（企画係意見）

以前出来て五等以下の回転機械には本記事の如き装置はやむを得ない次第であるが、此場合には分銅捲揚

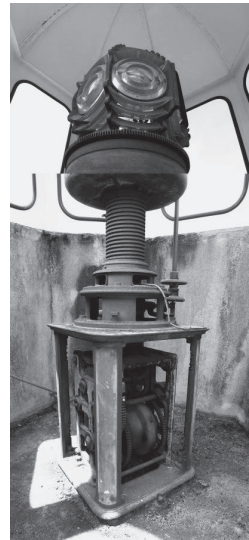


写真-3 百貫島灯台と同等の5等6面レンズと回転機械（令和3年7月 御幸灯台）

の時、堅軸なやせきく取付の「クラッチ」を外して、折射玻璃はなるべく規定に近い回転を指先で与へて置いて、捲揚を行ふ事にして貰もらつたら宜しい。記者も多分以上の事は行つて居らる、と思ふが、此機械では以上の手数はやむを得ない。

併ひかし近頃出来た五等回転機械（四等以上は勿論）は、特種な齒車装置（ダイヤアレンシヤル・ギア）があつて、分銅捲揚も其儘行つて折射玻璃も依然として略規定の回転を持続する装置になつて居るから、記者をして所謂「不完全なる寧ろ啞然たる」と嘆息せしめし機械も漸次少なくなる譯である。

溝口氏の陳情もむなしく、経歴簿を見る限り、百貫島灯台の回転機械は、記事が書かれた大正15年以降、

撤去される昭和27年まで、一度も改良改修された記録はありません。

萩原賢造氏は、百貫島灯台の回転機械にまつわる面白い話も、燈光昭和13年7月号の「被視察記」に次のとおり記しています。

視察二三日前、回転機械を分解して、石田善之輔首員は磨きたての機械が汚れぬよう視察の済むまで油を差してはならぬと言ふ。無理だとは思つたが筆者も本所を出たばかり、首員の言ふ通り分銅を増して回転した處が、特に機械に委しい増田錠三郎技手、機械に油気が少しも無い、軸端や軸座が真黒に焼けて居るではないかと叱られたが、マサカ汚れるから油を差さなかつたとも答へられず、モジモジして居ると石田首員が、今朝よく掃除したばかりで、とゴマかそうとして却つてドエライ大目玉を頂いた。随分無鉄砲な事をしたものだ。

最後に、経歴簿の視察記録には書かれていない、前記の「被視察記」にある百貫島灯台視察の珍騒動です。

時は八月の残暑、昼寝をして居た石田首員、新発田

丸（視察船）が見へたと言はれ、越中一本で飛び出し、（信号）旗を揚げたのを船上から見られてしまった。

筆者には教官である星野元貞技手、ボートから上るが早く―船に敬礼するのに素っ裸で出るとは何事だツ―と例の大雷様式でドンリつけ、君かツと睨まれたが、少し声を落として―ウム君にしては色が白かった石田君だろふ―と言はれホツとした。色が白くなかった為に冤罪を免れたのは筆者ばかりだらふ。石田首員は之も左程色の白くない二人の水夫に罪を被せてゴマかしてしまつた。後に水夫曰く「首員さんズルイヤ。」

#### 百貫島灯台の生活の楽しみ

燈光大正6年7月号の「百貫島より」と題した記事に、当時の百貫島の生活の全容が見られます。記事の作者は百貫島3年目の「松田利佐吉」氏で、首員は同年2月に転入した「半田喜一」氏でした。以下、同記事の全文です。

新緑目に楽しく、清風肌に佳なるの好時候となりました。諸兄愈御健勝邦家のため慶賀し奉ります。降つて本臺も半田兄御入来後は、大へん面目一新し、大に陽気になつて参りました。時折、一同一間に会合し

て櫻正宗に舌鼓を打ち、美妓びぎの美声（半田兄のチクオ  
ンキ）を聞きつゝ、極めて面白く愉快にやつて居ます。  
是から暇ある毎に大公望をキメ込み、又は蛸入道先生  
を征伐にも出かけます。冬季の木枯らしに酷くいちぢめ  
られた埋め合せにタント命の洗濯をして置きます。

さて従来、本臺への順路は弓削村へ上陸し同所より  
雇船で参る様になつて居ますが、是は大へん不利益で  
す。本臺へは尾道よりと今治と何れを問わず、必ず因  
の島三の庄港（図1参照）へ上陸して同所より雇船に  
て参るのが一番得策です。三の庄には渡海船も多数あ  
りて至極便利です。

且つ時間も弓削より  
は反かえつて早く参られ  
ます。渡海運賃は荷  
物の多少により又天  
候にもよりますが、  
先ず六拾錢以上一圓えん  
位です。

本臺より弓削村ま  
では海上約弍哩餘  
で、用便方まで四哩  
餘、弓削郵便局まで



写真—4 弓削島からの百貫島全貌  
(令和3年11月撮影)

海上約七哩です。

郵便配達は毎日午後（二時頃）に一回の規定ですが  
碌々参りません。平均一ヶ月七回位です。

本臺と弓削島間には不思議に風波の起る所で、夫れ  
が為め郵便船も来ないのです。備船がありましても夫  
れが為め急用の間に合わぬ事が多い。

家族携帯で本臺へ来る方は、産婆學や醫學の大略は  
研究して置く必要があります。

長太夫立標整理は、十日目毎に下潮さげしほに出発して上潮  
に歸臺します。夫れで假令好天氣でも潮順のわるい時  
と、又好潮順でも天候の險悪の時とは出向く事が出来  
ません。出張日の多半は夜間第一當直を終つてから出  
発することになります。當直の都合で出向かれない  
場合もままあります。回転燈で管理標識ひかを扣へて二人  
詰では決して安樂ではありません。

氣象月報は、毎月官船局と中央氣象臺とへ送ります。  
飲料水は、弓削村より取ります。雑用及浴用は天水  
と溜池の水です。

日用品及食品は、毎月一回備船を尾道市へ差遣わし  
て購求します。序便で弓削村及び大濱にも購求します。  
物価は尾道市は安い方でせう。

菜園は水不足のため、又風當り烈しいので碌々收穫

はありません。

村との交際は用  
便方だけです。

地方税金は一ヶ  
年間に一ヶ月の俸  
給の半額を要しま  
す。

来観人は、毎年  
旧曆三月上旬より  
四月中旬頃まで、  
本臺船圍庫前へ鯛  
網を曳くので夫れ  
を見物かたがた旁々上つて

来ます。其頃は孤島の本臺も中々賑々しくなります。  
解語の花（美女のたとえ）の見ゆるのも其頃です。

詰員の娯楽は、お定まりの読書三昧です。囲碁も可  
なりやって居ます。半田兄はチクオンキ一臺とレコー  
ド数十枚持つて居られます。夫れに毎月必ず新レコー  
ド二枚以上お買いになるので、おかげで豚児（自分の  
子の謙遜語）等大悦びです。時正に梅雨季に入ります。  
折角諸兄のご健康を祈ります。 大正六年六月三日稿



写真一五 百貫島灯台と官舎・付属施設  
(昭和33年12月 中国新聞社撮影)

明治43年に大浜崎潮流信号所が出来てから、百貫島  
灯台の巡回標識は、長太夫灯標だけになります。職  
員2名で潮流に左右される10日毎の海上標識の点検  
は、やはり大変だったようです。

当時蓄音機は、明治の終りに国産第一号機が出たば  
かりで、蓄音機もレコードも高価なものでした。蓄音  
機はハンドルを回してゼンマイでレコード盤を回転さ  
せて音を出すタイプで、電気式でないため音量の調整  
はできません。孤島の灯台で周囲も気にせず蓄音機の  
音色に、職員も家族も酔いしれていた、孤島の灯台生  
活の秘かな楽しみだったようです。経歴簿にある衛生  
簿（薬使用簿）を見ると、松田氏は当時35歳、20歳の  
妻との間には3歳の長男を筆頭に4人の子沢山で、百  
貫島は大いに賑やかだったことが想像されます。

拙稿27話の紀伊日ノ御崎灯台で紹介した内田十二氏  
も昭和12年3月からの約3年間、百貫島灯台に勤務し  
ています。内田氏は戦後、紀伊日ノ御崎で妻と長女と  
三女を赤痢で一度に亡くされ、その時の悲しい俳句が  
石碑に刻まれ今も同地に残されています。内田十二氏  
逝去後の1985年に子息の内田宏様が編集発行され  
た内田十二句集「石路の道」参考資料に、生前内田氏  
が記した回顧録「放浪四十年」が収められ、昭和初期

の百貫島灯台の生活の様子と俳人「内田とうじ」の誕  
生秘話が次のとおり記されています。

瀬戸内なら百貫でもよい

これも燈台専用語の一つで、瀬戸内海の燈台ならば、  
その一番不便な百貫島燈台でよいから在勤したいと云  
う意味です。「百貫島燈台看守長ヲ命ス」の辞令が来  
た事を安中（郷里）の父に知らせたら、折返し、長に  
なったのを祝福する返事が来ました。それに励まされ、  
狐島と云っても瀬戸内海だからと思ひ、勇んで赴任の  
途についたのです。

ところが途中、曾勤地の大角鼻燈台の小使に会いた  
かったので、大阪より船にて行く事にし、船が小豆島  
の坂手港に寄港した時、人見小使（今は亡き）は、大  
角鼻燈台の提灯をつけて、棧橋に来てくれて、涙声  
で「旦那様、百貫へお出でになるのですか」と云われ  
て、これは容易でないぞと思つたのでした。

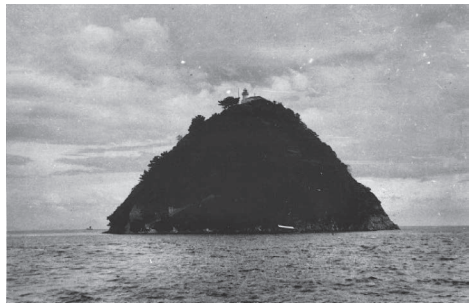
大阪川口を夕方出た船は、坂手、高松、多度津に寄  
港して翌朝、尾道へ着き、土生行き汽船に乗換へ、因  
島の三庄にて下船、そこで渡船を備ひ、一時間余りで  
百貫島燈台へ着任したのでした。

土生行きの船の上で見た百貫島は、三角の握り飯の

ような形で、その  
頂点に燈台が白く  
見え、なるほど、  
わが人見爺や、泣  
く筈だと思つたの  
ですが、着いて見  
れば公園を思わす  
ような幅の広い掃  
除の行届いた道が  
島の頂上まであり、悲観すべき何  
物もなく、やっぱ

り「瀬戸内なら百貫でもよい」の真実なる事を感じた  
のでした。百貫島は尾道と新居浜を結ぶ線上、ひょうしん燈灘の  
北寄りにある愛媛県越智郡弓削村に属する狐島です。  
島は海面より頂上まで七十米、面積は一万一千坪、民  
家はなく、全島が国有地で、燈台と、それを守る三世  
帯の住む退息所が、その頂きにあるのでした。

燈台の初点は明治二十七年、歴代の在勤者が狐島生  
活に処する、よき基準を作つておいてくれたので、す  
ぐに此処の生活に慣れることができました。百貫島燈  
台は現在（昭和40年当時）では、今治海上保安部燈台課



写真—6 布刈瀬戸から見た百貫島  
（昭和25年8月撮影：燈光会保管  
伊藤武夫氏アルバムより）

の管理に属し無人燈台になりました。即ち無人燈台にしなければならぬような不便な処と云う事になります。その不便な百貫島燈台も子等と過去を語る時、いつももう一度、百貫島へ行つて見たいの話になります。

この島で、はじめたのが私の俳句です。

春雨や 仙酔島は 今日遠し

横島や 白帆の上に 麦青し

この俳句が初めて燈台局の機関誌「燈光」に片岡泰王先生選にて載つたのは、昭和十三年五月号でした。ですから私の俳歴もいつの間にか三十年になつてゐるのです。初めた時の俳号は「とうじ」でした。本名の十二を、とうじ、と読み、百貫島燈台国有財産保存主任は百貫島島司ですから「とうじ」にしたのでした。此処で、狐島生活の断面を示す百貫島時代についた種句の註を読んでいただきます。

牡丹咲き 郵便も来て 今日たのし

百貫島の郵便は月十回で、三日目毎に、弓削島より郵便配達請負人が、小舟に乗つて持つて来ました。異郷の狐島で郵便船を待つ心持を察して見て下さい。郵便船の来る日には、朝から何をしてもおちつけず、弓削島の端に帆をあげた小舟の見えるのを今か今かと待ち、舟が見えれば仕事をやめて、舟の近づくのを見守

るのです。やがて舟は浜へ着き、郵便屋は坂を上つて来るのですが、郵便靴のほかに何を持つてゐるかが上で見ている者の、たのしみなのです。小包は勿論ですが、日用品の買物も頼むので、豆腐を持つて来たり、茄子や南瓜の苗を持つて来たりする訳です。

燈台へ 大鯛さげて 助役かな

これは私のホトトギス（昭和十六年六月号）初入選の句

燈台へ 大鯛さげて のぼり来る

の原句です。この句の取材の事實は、私の最初の種句、白帆の上に麦青き横島村の収入役が、風薫る頃「今日はいよいよお天気なのでお邪魔に来ました」と云つて、さげて来た鯛を差し出したのでした。収入役を助役に、中鯛を大鯛に脚色した訳です。

燈台の 人のみの島 枇杷熟す

この島には枇杷の木が沢山自生してゐて、実の熟する頃には、小使が毎朝一荷の枇杷を事務室の土間へかきいで来るのです。それを十時の茶に、家族諸共で食べながら、四方山の話に花を咲かすのでした。その他に、此処には先輩の植え残してくれた孟宗竹、無花果等があつて狐島生活にうるおいを与えてくれました。

尚海の幸として蛸取りと浅蜷掘りあり、尾道付近の海

の名所として訪れる参観人物語もあるのです。

### 百貫島灯台の訪問

百貫島灯台生活者が皆心待ちにしていた郵便配達の話は、この他の百貫島職員の燈光記事にも同じ様に見られます。彼らの待ちわびる思いが強かったせいか、令和の郵便番号簿には、今も百貫島宛ての郵便番号794-2503が存在します。配達を担当する弓削郵便局へ問い合わせたところ、郵便番号が現在の7桁に変更の際、既に百貫島には居住者が居ないことは分かっていたはずだが、「弓削百貫」の名前を残したかったのか、配達はできないが、百貫島宛ての郵便番号が今も確かに残されていることを同局長から確認しました。日本の郵便番号制度は、昭和43(1968)年に制定され、7桁化は平成10(1998)年ですが、百貫島灯台が無入化されたのは制度化以前の昭和37(1962)年のことです。

孤島なのに半世紀以上も郵便番号が残され続ける不思議な島、内田氏が、もう一度行つて見たいと焦がれた百貫島へ、愚性もようやくコロナ禍が小康状態となった昨秋、訪ねることができました。

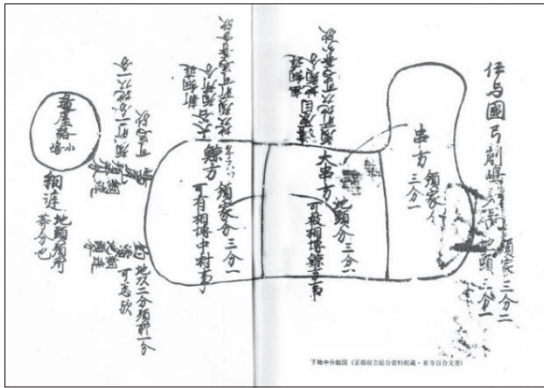
百貫島は現在、尾道海上保安部が島全体を管理しており、許可なく上陸することは出来ません。今回の灯台訪問は、尾道海上保安部長の上陸許可を得て、同保安部交通課長の特別の計らいで、灯台の工事検査に行かせていただき訪問しました。渡島にあたり、改めて百貫島の名前の由来を調べると、燈光大正8年6月号に前記の松田利佐吉氏が、「百貫島の地名に就て」と題した記事を次のとおり記しています。

面積拾参丁四反餘の小島、百貫目やそこらではあるまいと斯そふ思おもふて内々探あつて見れば、次記の様な理由である。

往古、長崎の某帆船大阪より一美人を得て、帰航の途中、今の百貫島沖で其美人に死なれ、其船長宗丹氏は、金子百貫文を出し此島を買ひ取り、其美人を此島に葬りて帰國したさうである。然るに其れより人呼んで宗丹島又は百貫島と称する様になつたさうである。

また、昭和61年9月発行の弓削町誌には、次の逸話が見られます。

話は、大阪のある大商人が、かわいいひとりむすめをつれて、大阪へ帰るとちゅうのことです。どうしたとか、むすめが、とつぜんわかかわからない病気にかかり、苦しみ始めたのです。ちやうど夏のこと、日ざしはいやと強く、むすめの苦しみはいよいよますますばかりです。なんとかしたい一心で、いろいろ手をつくしましたが、いっこうによくありません。一日、また一日とむすめは弱っていくばかりでした。



図一 2 辺屋路小島（左）と弓削島の古図  
（弓削町誌掲載 下地中分絵図）

ちやうど、船が辺屋路小島にさしかかった時でした。むすめはどうとう息をひきとつてしまいました。

父親は、かわいいむすめのなきがらを大阪に持って帰ったのですが、真夏のことなのでそうもいきません。そこで、すぐそばにうかぶ辺屋路小島に手あつくほうむってやりたいと思つて、近くの弓削島の久司浦に船をよせて、小島の持ち主に相談をしました。そして、この島を銭百貫で買うことに話がまとまったので、さつそく、この小島に手あつくむすめをほうむつてやったということです。

それからは、この島を、だれ言うともなく「百貫島」とよぶようになったといわれています。

百貫島は、弓削島が莊園として平安から鎌倉時代を通じて領家に支配された時は、辺屋路小島の名称で網場として扱われてきたが、いつの時代からか百貫島と名称が変わった。それが時期については二、三の伝説的なもの以外に確たる記録は見当たらない。恐らく江戸時代に入ってからであろう。

この二つの逸話の共通点は、大阪を行き来する船上で不幸にも女性が亡くなり、島の所有者からお金百貫で島を購入し、女性は百貫島に葬られたことです。手



厚く葬りたいのなら、大金を払い孤島なんかには葬らず、弓削島の名のあるお寺に託すのではないのかと素朴な疑問が残るところですが、島は百貫では売られていなかったようです。愚生が渡島後に確認した尾道海上保安部保管の百貫島灯台官有財産原簿には、島の購入記録が次のとおり見られます。

明治27年5月18日記帳 愛媛県伊予国越智郡弓削村大字上弓削字百貫丁一番地、同村 田頭貫一郎外15名ヨリ買上、壹〇〇三坪（全島面積）、代価二〇〇円七〇銭三厘

百貫島は灯台建設以前、弓削島の島民15名が所有しており、灯台建設に当たり国が二〇〇円で買収しました。島は百貫島ではなく二百円島でした。そんな余計なことも知らず、秋晴れの下、三角おむすびにも見える百貫島へ向かいました。

島の船着場から尾道保安部交通課職員と工事業者とともに九十九折の坂を上り、灯台を目指しました。道中の枇杷の木はまだ健在で、実を付けた柿の木も確認できました。百貫島灯台は、昭和37年の無人化後、木造の退息所や倉庫は撤去され、現在往時をしのばせる

ものは、石造の灯台だけとなつています。退息所跡にはコンクリートの電源舎が建てられ、今は発電機も撤去され、太陽光発電による地球環境に配慮したSDGsな灯台になっていました（写真7）。

百貫島灯台は、灯



写真-8 大下島灯台  
(平成31年4月撮影)



写真-7 百貫島灯台のソーラーパネル  
(令和3年10月撮影)

塔が円形か八角形かの見た目の違い等を除き、点灯時の灯質、光達距離、灯台の高さ、石のごつごつ感、付属舎の位置や内部の構造まであらゆる点が、同じ日に誕生した大下島灯台（写真8）と同じです。三原瀬戸の東の入口と西の入口に位置する両者は、外観の仕様等以外瓜二つの構成で設置されましたが、愚生には見過ごせない大きな違いがありました。大下島灯台にある古びた記念額（写真10）が、百貫島灯台にはないのです。三原瀬戸の灯台の中で、同じ有人灯台であった大久野島灯台（写真9）にも、大下島灯台と同じ記念額（写真11）が付けられていましたが、百貫島灯台には、同じ記念額の痕跡すら見当たりません。現在、百貫島灯台には、付属舎入口上部に灯台の名が刻まれ



写真-9 旧大久野島灯台  
（平成31年4月撮影）



写真-10 大下島灯台の記念額



写真-11 旧大久野島灯台の記念額



写真-12 百貫島灯台の記念額

た近年製作のもの（写真12）が取り付けられています。古い写真（写真1・13）を見ると、記念額がどこにも無かったことが分かります。

明治期の記念額の仕様や設置基準が書かれた資料は、まだ確認できていません。明治期の記念額を並べてみると、年代ごと様々に変化していることが分かります。一貫して変わらないのは、灯台名が書かれていないこと、それと日付が灯台完成（竣工）の日ではなく、「初<sup>てん</sup>点」または「<sup>てん</sup>点燈」の文字が付された点灯開始の日であることです。記録では三原瀬戸の灯台の完成（竣工）は、記念額の点灯の日とは異なる同年7月4日です。

以下は、明治期各年代の記念額の一例です。

明治初年



明治2年1月 観音埼灯台



明治3年6月 檉野埼灯台



明治3年6月 伊王島灯台

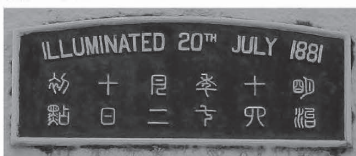


明治3年11月 神子元島灯台



明治9年10月 尻屋埼灯台

明治10年代



明治14年7月 立石岬灯台



明治16年7月 祿剛埼灯台



明治17年3月 和田岬灯台(改築)

明治20年代



明治23年8月 友ヶ島灯台(改築)



明治28年12月 姫埼灯台

明治30年代



明治33年4月 中渡島灯台



明治35年3月 トドケ埼灯台

明治40年代



明治45年1月 特牛灯台



明治45年7月 蓋井島灯台

明治期の45年の間に、様々な記念額が作られていま  
す。今回の三原瀬戸の灯台のように、同時期に同じ地  
域で設置された灯台の中でも取付けの有無があるよう  
に、当時は厳密な規定や仕様がなかったのかもしれない  
せん。これまでの調査で唯一判明していることは、記  
念額は灯台完成後または数年後の灯台視察時など点灯  
開始以降に取り付けられていることです。経歴簿や国  
有財産台帳の記念額に関する記録、完成当時の写真を  
見る限り、現在のような点灯開始に間に合うよう灯台  
建設時には取り付けられていなかったようです。

灯台に上ると、ハリハンも大下島灯台と違うことに  
初めて気が付きました。後日、古い写真を見ても、最  
初から百貫島は三角形、大下島は四角形のハリハンだ



写真-13 昭和25年8月視察時撮影  
の百貫島灯台  
(伊藤武夫氏アルバム写真)

ったようです(写  
真8・13参照)。同  
じ時期に建設した  
石造灯台で海拔高  
も灯高もほぼ同  
じ、レンズ・灯器  
の構成も完全に同  
じなのに、なぜハ  
リハンだけが異な  
るのか全くの謎で  
す。

ソーラーパネル  
が設置された旧電  
源舎屋上に上ると、秋の瀬戸内海の360度大パノラ  
マが展開していました。その中を大型客船が、動作確  
認のために点灯された百貫島灯台の灯火を仰ぎなが  
ら、静かにゆっくりゆっくりと、三原瀬戸へと航行し  
ていく様は、まさしく絵に描いた風景そのものでした。  
あつという間の滞在時間、構内をくまなく駆け巡り、  
後ろ髪を引かれる思いで百貫島灯台を後にしました。



写真-14 尾道交通課職員と百貫島灯台  
(令和3年10月撮影)

## 志賀直哉が見た百貫島の灯

小説の神様と呼ばれた志賀直哉が、大正10年から15年以上も費やし書き上げた彼の代表作「暗夜行路」には、百貫島灯台が登場する有名な一節が見られます。

六時になると上の千光寺で刻とくの鐘をつく。ごーんと  
なると直ぐごーんと反響が一つ、又一つ、又一つ、それが遠くから帰って来る。其頃から、昼間は向ひ島の山と山との間に一寸顔を見せてゐる百貫島の燈臺が光り出す。それはピカリと光って又消える。造船所の銅を熔かしたやうな火が水に映り出す。

志賀直哉は、大正元年11月から翌年5月までの約半年間、尾道の街を見下ろす長屋に住んでおり、そこで見た情景を暗夜行路に記したとのこと。その長屋は、千光寺へ向かう坂の途中に建っており、今も記念館として残されています。残念ながら、昨年春に記念館は閉鎖され、彼が見た同じ景色を眺めることは出来ませんが、長屋からは百貫島の灯火は、向島の山に隠れて当ても見えなかつたようです。

令和4年のお正月は帰省せず、愚生はこの拙稿を書

いており、思い切つてしまなみ海道を渡つて、尾道の千光寺へ初詣に行きました。もちろん志賀直哉が見た百貫島灯台の灯火確認も兼ねた初詣でした。灯台の点灯時間に合わせ遅い時間の到着でしたが、コロナ禍の東の間の終息のせいで、千光寺へ向かう細い坂道は、人が途切れることはありませんでした。坂の途中の長屋のある高さでは、百貫島の灯火は、やはり見えませんでした。そこから少し上がった千光寺の藤棚の一段下がった広場で、ようやく向島の山の尾根の間から10秒に1回の閃光が見えました。千光寺の見晴らしまで上ると、島のシルエットも確認できました。お寺の職員に聞いたところ、紛れもなくその光は、暗夜行路に書かれた灯台の光だと教えていただきました。実際に志賀直哉が見た灯火は、大正8年に回転機構が水銀槽に変更されるまでの20秒に1回の光でした。思った以上にはつきりと確認できたその灯火を、なんとかカメラに収めようと、何枚も何枚も失敗しながら、時間を忘れて写真を撮り続けていました(写真15)。

6時になり、すっかり忘れていた千光寺の鐘かねの音が鳴り渡りました。百貫島の灯火と尾道の夜景がしっかりと心に刻まれた感動の瞬間でした。体にしみわたる鐘の音を感じながら、この音と景色と百貫島の灯火が、

尾道の原風景として永遠に残されるようにと願わずにはいられませんでした。



写真-15 千光寺から望む百貫島の灯火  
(令和4年正月撮影)

(明治の灯台の話68 百貫島灯台)

百貫島灯台訪問の機会を与えていただきました尾道海上保安部交通課長高原誠次様、百貫島灯台の古資料等貴重な文献を提供いただきました同保安部次長近藤竜一郎様、第六管区海上保安本部整備課長麓茂樹様(元尾道交通課長)、そして弓削島と百貫神社に関する多くの情報を提供いただきました弓削島高濱八幡神社宮司亀山和磨様に対しまして、この場を借りて改めて深謝いたします。

## 関門海峡との出合(1)

# 白洲灯台、部埼灯台、六連島灯台

普通会員

岩尾亮二



関門海峡、白洲灯台、部埼灯台、六連島灯台となる  
と私達、航路標識の保守管理に携わった者にとつて即  
座に頭に浮かぶ歴史は江戸時代の幕末から明治維新に  
かけて徳川幕府の鎖国政策に対し開国を求める欧米列  
強との覇権争いとも言える改稅約書等（別名、江戸条  
約、下関条約、大阪約定等）が記憶に浮かび西洋技術  
の導入で建設、設置が進められた六連島灯台、部埼灯  
台、白洲灯台に結びついていく。

そして、私自身も海上保安庁職員として39年間勤め、  
この関門海峡で通算10年間、そのうちの通算5年間は、  
昭和28年に各灯台の集約管理政策で発足した関門航路  
標識事務所業務に従事しながら関門海峡の歴史を考  
える時に我が国の歴史の書籍である古事記、日本書紀  
等の記載内容及ぶこともなく、私達の暮らしぶりの  
和の文化、慣習の伝承に関門海峡が関わっていたこと  
に気付きもせずに潮流信号の運用、航路標識の保守管  
理を行っていたことを振り返る今である。また、古く

は我が国の大陸との文化交流、交易として遣隋使、遣  
唐使等が派遣され、その行程ルートでも同海峡におい  
ては何らかの歴史的な動きがあったものと思われる  
が、そのような視点に及ぶことは無く基本的には明治  
維新後の関門海峡の歴史の西洋式燈台の設置点灯、そ  
して管理運用の域を出ていなかった。

関門海峡で業務に従事していた現職時代は、関門海  
峡を通航する船舶の物流が日本経済にとつて重要であ  
り、国民総生産（GDP）の20%以上を担っていると  
言う統計を常に意識しながら業務に従事していた事を  
思い出す。しかし、退職して15年、当時の資料を見て  
振り返ってみると江戸条約以前の関門海峡の歴史は奥  
が深く、我が国の古代から近代まで大陸文化、西洋文  
化の伝導の海路であったことを伝えている文献が多く  
見受けられる。そして我が国の中央集権化が進む中、  
北国や南国の暮らしぶりの和の文化や食習慣等がこの  
海峡を通って全国に広がり、現在の私達の日常生活  
の中に根差していることに気が付くしだいである。

もっと深く考えると、もし関門海峡が無かったら今  
の私達の生活習慣、佇まいなども違っていたかもしれ  
ない。まさに航路標識業務に関わった者が退職後に気  
付いた事柄であり、歴史である。先ず関門海峡の名称

は大正時代まで地域での呼び名や公的資料を含めて下関海峡と表現している。文献によつては昭和初期の資料でも下関海峡と記し関門海峡の2つの名称を同時に使用している時代もある。確かに江戸、京都から見た場合、九州を隔てる海峡を本州の最南端の地名「下関」を使つて呼ぶのは理にかなう。加えて、現在はほとんど言われることが無いが江戸時代中期以降ぐらいであろう大阪の難波が商業的に栄えていた当時は下関を「西の難波」と呼んでいるほど交易、商業の地域として認識されていたことが語られていた時代もあり海峡の名称に「下関」と言ったのも当然と思われ当たり前であつただろう。

この下関海峡が歴史教科書等や書籍で大きく登場するのは平安時代後期の源平合戦の壇ノ浦の戦いと言つていいかもしれない。また、江戸時代の始まり、宮本武蔵と佐々木小次郎の巖流島の決闘がこの海峡の当時「舟島」と呼ばれていた島で戦われたことも小説や漫画等でよく紹介され知られている。そのような時代、当然下関海峡の名前さえも無かつたことは明らかである。「海峡」と言う言葉の概念さえなかつたと言え

る。国語的には「海峡」は「山間の谷間の海」と言うことを意味し「陸と陸との間に挟まれ海域の狭くなつた部

分」と解説されている。向こうの陸地はこちらの陸地とは海で隔てられている、陸続きで無いことを表す言葉と理解できる。つまり、海上を航行する船舶からの視線で捉えた名称ではなく、陸で生活している人々によつて「向こうとこちらは陸続きでない、歩いていけな

いよ」と言う意味で表現した言葉と言つてよさそうである。

この海峡、一般的には認識が薄い、地図で見ますと彦島を挟んで大瀬戸、小瀬戸の2つの瀬戸に分かれており、本州と九州を隔て、その2つの瀬戸が合流し早瀬の瀬戸につながっているのが関門海峡であり歴史的に海峡の名前より瀬戸の名称で呼び合つていたことが習慣として伺える。瀬戸の国語的な解釈では「幅の狭い海峡で潮汐干満によつて生ずる激しい潮流のために海底は播鉢状になる」と解説している。その瀬戸は船舶の航行には危険が伴うわけであり、安全に航海するために潮の流れのゆるみを待つて通航することになる。そのため海峡の周辺海域には潮待ちをする船舶のため津々浦々の港町が形成され発展していくことになる。

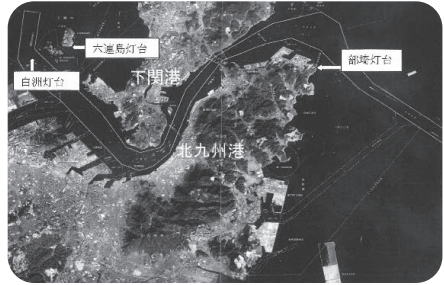
ちなみに、関門海峡の早瀬瀬戸の潮の流れは、周防灘から響灘側へ流れる西流は比較的穏やかで響灘か



ら周防灘側への東流は極めて激しい。当然、周防灘の海岸に潮待ちのため停泊を余儀なくされる船舶は多くなるわけである。周防灘側に太刀浦、田野浦、壇ノ浦の三つの浦の地名が残り響灘側に一つだけ福浦の地名が残されている歴史がうなずけるし物語っている。周防灘の方には沢山の浦があったのも海峡の潮流の状況を語っていると見えるし壇ノ浦、福浦が発展し、下関、門司に繁栄をもたらしてきたのが海峡の歴史と言えるであろう。



関門航路標識事務所および関門浮標基地  
灯台見回り船（せきうん、せきひかり）  
設標船かいおう



関門海峡航空写真

加えて、我が国の文化文明の歴史の面から遡って見ると、この海峡は大陸文化、西洋文化を江戸、京都に導いた海路と言っても間違いではなく歴史書等でもそのような記述が見られる。特に江戸時代の鎖国時代は、長崎出島にもたらされた世界的に進んだ考え文化は出島から海路を辿り九州と本州を隔てている関門海峡を経由して京都、江戸へもたらされたことを紹介している歴史は日本史の歴史教科書等でも学んできた。あまり知られていない諺で江戸時代幕末から明治に至る時代の関門海峡の海上交通の状況を「帆船の下関、汽船の門司」と言う言葉を生み出して町の発展の様子、歴史を明治時代になって表現している。関門海峡が海上交通の要衝として歴史の変遷をたどってきたことを語る言葉であろう。

紹介した写真は関門航路標識事務所に小さな写真で残されていた資料であり、石積みみの堤防上の燈明台と船舶の主帆、汽船であることから判断し明治時代の初



燈明台と汽帆船

期に下関の長府方面の港で撮影された写真と判断できる。「帆船の下関」の言葉に誘われて歴史を遡ってみると歴史教科書では必ず出てくる江戸時代に日本国内の農産物等の交易に従事した「北前船、樽廻船、菱垣廻船」の絵姿が目につかぶ。この歴史は日本列島を東廻り、西廻りする海運であり、津軽海峡、関門海峡を通り太平洋沿岸、日本海沿岸、瀬戸内海を経て江戸、京阪に地方の物資を運び、江戸幕府の中央集権化の進展と共に中央の雅文化を地方へ普及させていった歴史は様々な文献で紹介されている。また、物流の流れ文化や生活習慣等の事柄によつてはもつと歴史を遡つて関門海峡を経て全国に広まっていたと考えてよいかもしれない。このことは、燈光会が灯台百周年を記念して昭和四十四年に発行した「日本燈台史」に紹介されている。「海峡」について燈台史の一面から海峡の歴史を紹介させていただいたが、要するに時代時代で関門海峡は私達の経済活動、生活に大きな役割を果たし、その役割が進展し名称も変わってきたことは間違いないようである。

歴史は捉え方で本質の幅、深みは身近になると思ってもらつてこの先も読んでいただければ幸せである。日本列島には沢山の海峡、瀬戸があり加えて水道もあ

る。各地域で呼ばれている海峡等の名称に時代的に変遷が見られる場合は歴史の変遷が根底に見られるかもしれない。

江戸時代に東北地方の豊かな農産物を江戸、京都へもたらした海上交易の主役である北前船の功績について思いを巡らせる中、過去の転勤を重ねる中で面白い体験を思い出した。昭和四七年に祖国復帰となった沖繩の先島「宮古島」に米国コーストガードが運用していたロランAステーションを引き継ぎ運用するため同島へ赴き宮古島ロラン航路標識事務所勤務となった。ロラン局宿舎の生活で地元の方々との付き合いで沖繩料理を頂くこともあった。その沖繩料理に昆布の料理が多かった。当然、昆布は沖繩の海では採れないわけであり、日本列島の北国で採れた昆布が沖繩にもたらされ、栄養的に優れ味も良くなる食材として沖繩の方々々に重宝され日常的に使われるようになり沖繩料理に使われるようになったのであろう。宮古島ロラン局には北海道から赴任してきた家族もあり、その家族の方の情報では北海道と値段が変わらないとの話も耳にしたことがある。いつの時代から沖繩の家庭で歓迎され広く使われるようになったのか定かでないが、美味しく栄養があり経済的な食べ物として食卓に上り食

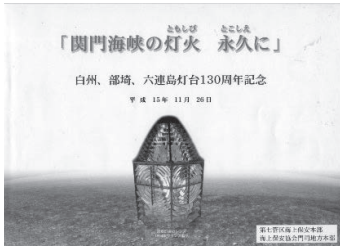
生活の習慣として古くから日本列島に沿って海峡、海路を経て琉球列島の沖繩へもたらされたことが想像できる。そのように考えると、関門海峡を通峡した北前船で九州へ運ばれた昆布が沖繩に届いたと考えるのは有り過ぎだろうか。私の故郷、熊本でも正月料理に昆布は欠かせない食材でもあった。つまり和食の食材としては誰でも認める食材であり、平素の三度三度の食事で昆布は欠かすことのできない食材と言っても過言ではない。当然のことであるが熊本の家でも昆布は採れない。この体験から考えると、関門海峡が日本の伝統和食の文化の広がりにも果たした役割については異論のないところであろう。江戸時代の北前船、樽廻船、菱垣廻船の歴史を紹介した資料では、先にも記述したが、北国、九州の農産物を京、江戸にもたらし、京、江戸の雅文化を地方にもたらしたと記述した文献は良く見かける。関門海峡が我が国の和食の広がりにも影響を及ぼしたであろうことは歴史の流と、現在の私達の食習慣から確かであろう。

関門海峡の名称の歴史を辿っているうちに気が付いたことで同海峡が日本の歴史、文化に加え国民の日常生活に大きく関わっていたことは間違いないようである。そのような視点で関門海峡をとらえると、海峡

の安全航行を確保する燈台を守る仕事に就いていた私達にとつて、今になって仕事冥利に尽きる思いであると同時に日本列島の様々な歴史に気付くしいである。江戸時代の後期、幕末の欧米列強との厳しい外交の流れの中で整備されていった六連島灯台、部埼灯台、白洲灯台のはたしてきた役割は大きく、もつと、もつと語られていいのではないだろうか。同時に関門海峡と呼ばれるようになった以前、下関海峡時代の3灯台の歴史の大切さにも気付かされる今でもある。

関門航路標識事務所の歴史は昭和28年に六連島灯台、赤坂信号所、蓋井島灯台を集約する形で関門港航路標識事務所として発足している。現在は門司港、下関港であるが当時は関門港の名称であったわけである。

そして、関門海峡を代表する白洲灯台、部埼灯台、六連島灯台の点灯年次は明治3年から明治5年の間に点灯し関門航路標識事務所が航行援助センターに移行する年に3灯台共に、平成15年には点灯130年を満了し迎えている。多少の点灯年次に違いがあっても基本的に点灯130周年を迎え地元海上保安協会の幹事で灯台の歴史を顕彰されている方から「白洲、部埼、六連島灯台130周年記念式典」の開催をと言う導き



記念誌表紙



関門海峡主要航路標識CD

があり平成15年11月に協会主催で「白洲、部埼、六連島灯台130周年記念（関門海峡の灯火永久ともしびとこしえに）」の命題で記念式典が小倉中心のホテルで海事関係者及び行政機関の200名以上の方々の出席の下に挙行された。第七管区海上保安本部灯台部の支援の下、関門航路標識事務所としても3灯台の設置点灯の歴史、沿革をまとめた記念誌、及び主要な航路標識のCD版を作成した。

式典では関門海峡の航路標識の歴史をプレゼンテーションで紹介し関門航路標識事務所が次年度には門司海上保安部航行援助センター、若松海上保安部航行援助センターとして海上保安部の担任水域に所在する航路標識を管理する体制で再出発することも報告させて

頂いた。歴史と伝統を踏まえた関門航路標識事務所の最後を報告するに相応しい記念式典となった。

種々の準備は今流の電子機器を駆使しての準備であり記念誌の作成、プレゼンテーションのデータ整理など若い職員を中心に意気揚々と進んでいたことが思い出される。式典終了後、中心になって記念式典を進められた幹事さんは喜ばれて白洲灯台の銘板を写し取る形で、式典開催を記念する銘板が当時の北九州市長の揮毫で作成された。そして、式典を開催する作業を進めた関係機関及び関係者に寄贈された。これも、おそらく3灯台の歴史の中で白洲灯台、部埼灯台の崇高な偉業の歴史が幹事さんの背中を押したのではなからうか。御蔭で自宅の客間の棚には白洲灯台の銘板が今も鎮座している。

振り返ってみると六連島灯台の燈明番士で始まった関門航路標識事務所は、海峡の200基以上の航路標識を管理運用し海峡の安全を担い我が国の経済の発展に寄与して



灯台記念額

きた灯台等を管理してきた事務所である。その事務所の最終章に相応しい記念式典であったことを海上保安協会並びに当時中心になってお世話を頂いた幹事の方々、並びに事務所で沢山の資料の作成にあたった若い職員の皆さんに感謝申し上げたい。

約300年続いた江戸、徳川幕府は欧米の産業革命に起因する地球規模での交易の基、開国を求められ日本列島の主要な港の開港が求められて行く。

その流れの中で条約、約定が結ばれ主要な灯台が建設されていったことは冒頭で紹介したとおりである。

明治4年に初点灯した六連島灯台は我が国が「西洋に追い付け追い越せ」のキャッチフレーズを基に世界に門戸を開き、文明開化を目指した当時の歴史を十分とどめている灯台と言えるのではないだろうか。

また、白洲灯台、部埼灯台には帆船による国内の海運業が発達した江戸地代から明治維新にかけ海の安全を願ひ船で働く人々の命を守った尊い理念の偉業、偉人の歴史がある。

その永い歴史を経て育まれた関門海峡の様々な慣習、行事は関門地域の方々の文化として地域の生活習慣に根付き現在に至っているのではないか。

そして現在も偉業、偉人を顕彰し関門海峡の安全の

ための活動を多岐にわたって推進しておられる顕彰会があり活動しておられる。そしてその活動のおかげで育まれた新たな会、「美しい部埼灯台を守る会」も誕生し関門海峡の新たな文化が育まれて来ている。この偉業、偉人の歴史と共に海峡が育んだと思われる歴史文化を含めて六連島灯台、部埼灯台、白洲灯台この3灯台の歴史を逐次に紹介してみたい。

六連島灯台へつづきます

#### 追記

御気付きの方もおられると思います。記念誌、記念CD版のタイトルで白洲灯台の「サンズイ」が抜けています。当時、海上保安庁職員のデスクにオンラインのパソコンが配布され、鉛筆で文章を書く習慣からパソコンに移っていった時代でした。加えまして記念式典は関門航路標識事務所、第七管区海上保安本部、地元海上保安協会の基で極めてスピーディーに企画作業が進められました。間違いに気づき修正する時間もなくて記念式典当日を迎えた記憶が残ります。おゆるしくださいませ。



## 二 管 区

### お化粧直して地域連携 地元有志と共同で 碁石埼灯台塗装を実施

釜石海上保安部では、毎年GWに開催される大船渡市の碁石海岸観光まつりにおいて、同海岸に立地する碁石埼灯台の一般公開を実施するとともに、まつり会場において当庁PR活動を行うなど、「恋する灯台」でもある同灯台を通じた地域連携に取り組んでおります。

しかし、建設から60年余り経過し、外壁も建設当時の白亜の美観とは程遠く、色はくすみ、ところどころにカビや汚れが目立つ状況で、三陸海岸の抜

群のロケーションの中にありながら、灯台だけが、どこか古ぼけた印象となっていました。

再塗装工事の要求を上げようにも、現状では昼標効果には全く支障がないことから、予算がつく見込みも期待薄です。

それでも、三陸海岸屈指の観光地である碁石岬にあつて、地元住民からの親しみも篤く「恋する灯台」として認知されるなど、昼夜問わずして市民の心に灯をもたらし続ける碁石埼灯台を何とか蘇らせようと方法を検討していたところ、二管本部交通部整備課に塗装用のペンキが余っているとのこと、それを譲ってもらい職員による塗装作業をすることとしました。

当部では、碁石海岸まつりに関連し、碁石海岸周辺の観光施設関係者により年数回開催される碁石海岸観光施設等連絡会議に参加しております。

毎回、直近で開催されるイベントについて情報共有が行われる程度の会議



<新聞社4社 TV2社の取材>



外壁の汚れが著しい…。



< 灯台塗装作業風景 >



< 外壁塗装作業風景 >



< 塗装を終えてご満悦な会員との記念撮影 >

なのですが、地域の灯台として親しまれているこの灯台の塗装作業は、地元有志と合同でやった方がより素敵な活動となるのではないかとこの考えのもと、会議席上にて当部の灯台再塗装計画及び塗装作業への参加についてお話ししたところ「ぜひ一緒にやらせて頂きた

Before...



After !



輝きを取り戻した基石埼灯台

た。  
作業後、灯台は汚れ一つない真っ白  
い」と快諾頂き、地元有志との共同塗装が実現したのでした。  
塗装当日は当部職員4名の外、基石海岸観光施設連絡会議会員及び地元環境ボランティア等15名の計19名で塗装作業にあたり、雨が心配されるなか灯塔や囲障などを協力して塗り上げました。

な姿に生まれ変わり、建設当が惚ばれ、地域の灯台としてますます輝きを増した容姿となりました。

灯台の化粧直しに地域の皆様のご協力を頂けたことは、大変ありがたいこととあります。

今後も地域との繋がりを大切にし、より市民に親しまれる灯台の利活用に取り組んでまいります。

(釜石海上保安部交通課)

#### 四 管 区

### 灯台を活用した

## 地域観光振興に係る勉強会 〜不動まゆう氏を招いて〜

鳥羽海上保安部は、令和3年12月13日(月)、志摩市灯台活用推進協議会(以下「協議会」という。)が実施する「灯台を活用した地域観光振興に係る勉強会」に協議会オプザーバーとして出席しました。



安乗寺(あんじょうじ)における勉強会の模様

協議会委員等10名は、12月12日(日)に大王埼灯台周辺地区を、翌13日(月)に安乗埼灯台周辺地区の街歩きを行い、灯台を訪れた方に周辺地域の魅力を知っていただくため、近くの海女小屋見学や寺院での住職の説法など、周辺施設と連携した体験型イベントを模

索しており、コース選定に役立てるため計画されたものです。

この勉強会においては、協議会オプザーバーである不動まゆう氏(灯台どうだい編集長)を招き、世界の灯台や日本全国における灯台を活用した観光振興の取り組み事例の勉強や意見交換が行われました。

安乗埼灯台の調査においては、交通担当次長が旧安乗埼灯台の基礎石や歴史の説明を行い、普段見られない現安乗埼灯台の灯台自動制御装置や分銅筒内部などを見ていただきました。

この日は風が強かったものの視界が良く、灯台に登った際には、踊場から富士山が綺麗に見えたことから、委員の方のテンションが高まっていました。

なお、燈光会安乗埼支所長によれば、令和3年11月3日に行われた安乗埼灯台の特別公開以降、新聞にて安乗埼灯台に登れるということを知ったという方の参観者が平日で約40名/日、休日においては約100名/日(12月、1



月)あり、従前の2倍程度の方が来訪されているとのこと。特に、特別公開直後は、コロナ関係の制約がなかったこともあり、平日でも約60名/日の盛況ぶりだったそうです。

協議会の依頼を受け実施した今回の大王埼灯台及び安乗埼灯台のダブル特別公開イベントは、約1,000名の



遠くに富士山が見えています！

来訪者があったことから、灯台を活用した地域おこしは、まだまだ発展の余地があると考えています。

(鳥羽海上保安部交通課)



不動まゆう氏

(カメラを向けるとポーズをとってくれました。この先に富士山が…)



防草属カリトルンジャー見参！

**神島灯台クリーン大作戦**  
**防草属カリトルンジャー出動！**

鳥羽海上保安部は、令和4年2月8日(火)、神島灯台及び神島無線固定局敷地の環境整備として樹木伐採及び草刈りを行いました。

冬場に草刈り?と思われる方が多いと思います。夏場に灯台周辺の草刈りも行いますが、鳥羽海上保安部管轄地

域は、111基の航路標識を管理しており、特に草が繁茂した箇所は、ハチ、ヘビなどの強敵が潜伏していることから、危険地帯については、冬場に活動を行っています。

神島灯台周辺の環境整備にあたっては、樹木及び草の繁茂が著しかったため、チェンソー操作など特殊訓練を受けた「防草属カリトルンジャー」を出动させました。

今回の神島灯台クリーン大作戦においては、新品の充電式草刈り機がタイミング良く納入されたため、新兵器の慣熟訓練もかねて交通課等から精鋭4名が参加し、樹木・雑草と約半日格闘し、見違えるほど(?)綺麗にしました。

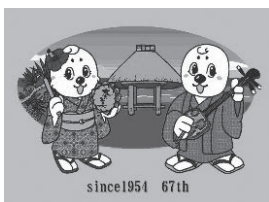
なお、交通担当次長は、33年前に神島灯台の灯台守を行っており、久しぶりの神島での灯台守作業に従事し、感慨深いものがあつたそうです。

神島灯台は、映画「潮騒」の舞台となっており、春には灯台周辺に桜が咲

き、島の方や観光客が訪れることから、綺麗になった神島灯台を楽しんでほしいと考えています。  
(鳥羽海上保安部交通課)

## 十 管 区

離島の航路標識の  
監視協力者を訪問  
海上保安業務へのご協力に感謝



奄美海上保安部は、11月29日、30日、徳之島方面の航路標識の巡回点検などに併せて、徳之島の見崎灯台など5つの航路標識の監視協力者など6名(団体を含む)を訪問、日頃の海上保安業務へのご協力に感謝し、引き続きのご協力をお願いしました。そして、より身近に海上



嶺山氏、徳之島最北端  
金見埼灯台の監視協力者  
感謝と引き続きのご協力をお願いしました

保安庁の活動を知って頂くため、奄美海上保安部便り第60記念号と来年の海のカレンダーを夫々に手交しました。  
管理する35基の航路標識は、奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の6つの外洋離島に点在します。このため、その適切な管理には、監視協力者の存在が重要です。特に、台風シーズンは、台風通過後の航路標識への被害の迅速な把握と復旧に不可欠です。奄美海上保安部は、地

域の皆様との絆を大切に奄美群島の安全  
に務めます。

(奄美海上保安部)



## 本会が「航路標識協力団体」に指定される

(令和4年2月22日)

昨年の通常国会において、航路標識法が改正され、「航路標識協力団体制度」が創設されました。本制度に基づき、本会が参観業務を行っている16基の灯台における航路標識協力団体として海上保安庁へ申請を行った結果、航路標識協力団体として関係管区海上保安本部長から指定を受けましたので報告いたします。

# 歴史的航路標識資料展示室整備事業について

「犬吠埼灯台航路標識資料展示室が完成しました！」「航路標識資料データベース」公開のお知らせ！

燈光会事務局

## 1 はじめに

公益社団法人燈光会では、航路標識事業に関する周知啓蒙を図ることを目的として、令和2年度から各支所等で保管している歴史的な航路標識資料を旧犬吠埼航路標識事務所庁舎内に移設・保存するための事業を行ってまいりましたが、この度、令和3年12月28日に犬吠埼灯台航路標識資料展示室が完成しましたので、この整備事業の内容、実施状況をご紹介しますいただきます。

## 2 事業内容

公益社団法人燈光会では、全国16か所の参観灯台のうち12か所に灯台資料展示室を整備し、当該参観灯台による参観業務のほか、航路標識の役割や歴史、航路標識資料などを展示することで航路標識の周知啓蒙を行っています。また、これら航路標識資料のうち、歴

史的な航路標識機器については、近年の技術革新による機器の変遷には著しいものがあり、当会が保有する大型のフレネルレンズ、石油灯器、チャンス式灯器、ガス灯器、又は水銀槽式回転装置などの資料については、海上保安庁の行う灯台の一般公開などでは見ることができなくなっています。

当会が保有するこれらの資料は、全国各地の燈光会支所などの倉庫に保管されたままで、一般に公開されないものも多いことから、これらの資料を旧犬吠埼航路標識事務所庁舎内に移設・保存するとともに、灯台記念日等のイベントにおいて、適時に一般公開するほか、燈光会ホームページにより閲覧できるように整備したものです。

## 3 整備計画

(1) 令和2年度

○旧犬吠埼航路標識事務所庁舎への展示台等の展示施

設の整備

(2) 令和3年度

○ 航路標識資料を犬吠埼支所へ運搬、搬入

○ 犬吠埼灯台航路標識資料展示室の整備

○ 「航路標識資料データベース」の公開

#### 4 当該資料展示室の整備状況

(1) 令和2年度

○ 犬吠埼支所は、全国の各支所の中でも参観者数が多く

く灯台構内も広い参観灯台であり、歴史的航路標識

資料展示室の整備には、同一構内の旧犬吠埼航路標

(2) 令和3年度

○ 歴史的航路標識機器等の資料は、全国各地の燈光会

た。(写真①～④参照)

識事務所庁舎が適地であることから、施設管理者である銚子海上保安部や上部機関の第三管区海上保安本部の関係者の皆様に対する事前説明を実施し、ご了承のうえ当該整備事業を開始しました。

○ 令和2年7月に、第三管区海上保安本部長から当該航路標識資料展示室整備に係る国有財産（建物・事務所建41・9平方メートル）の使用許可をいただき、その後、必要最小限の展示室内装整備を実施しまし



写真① (旧倉庫施工前)



写真② (旧倉庫施工後)



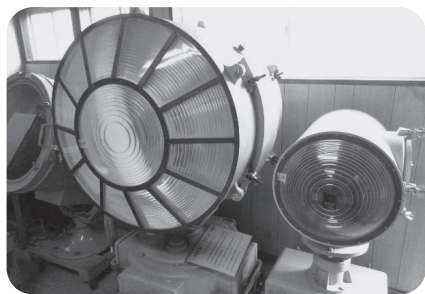
写真③ (旧車庫施工前)



写真④ (旧車庫施工後)



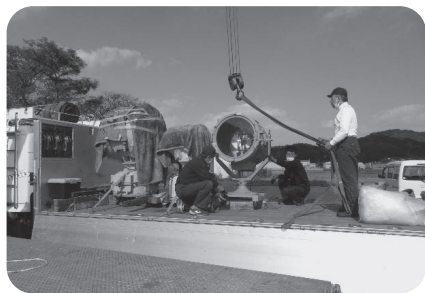
写真⑤（搬出前状況）



写真⑥（搬出前状況）



写真⑦（搬出状況）



写真⑧（搬出状況）

支所などの倉庫に保管されておりますが、本整備事業では、下関地区の倉庫に、90センチメートルビーコン灯器等大型の航路標識資料のほか数多くの資料が保管されていたため、関係者のご協力の下、当該保管資料を犬吠埼支所へ搬入するべく、資料をリスト化し、搬入資料の選別を行いました。令和3年11月15日、関係者の皆様と燈光会角島支所（囑託）平尾氏の立会いの下、当該保管資料の搬出を行い、無事に犬吠埼支所へ搬入（運搬）しました。（写真⑤～⑫参照）

○ 本体工事である犬吠埼灯台航路標識資料展示室整備工事に先立ち、令和3年9月に、第三管区海上保安本部長から電源引き込みのための電力線路変更工事に伴う国有財産（土地3・4平方メートル）の使用許可及び当該整備工事に係る事前承認をいただき、その後、令和3年10月4日～12月31日の工期で整備工事を実施し、令和3年12月28日に当該資料展示室が完成しました。

・ 電源引き込み

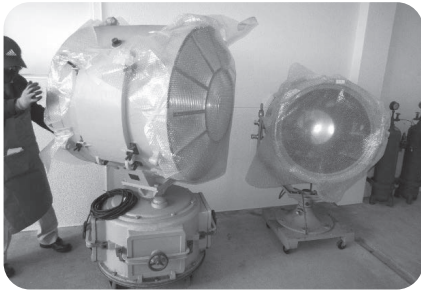
旧犬吠埼霧信号所（霧笛舎）から当該資料展示室



写真⑩（搬入状況）



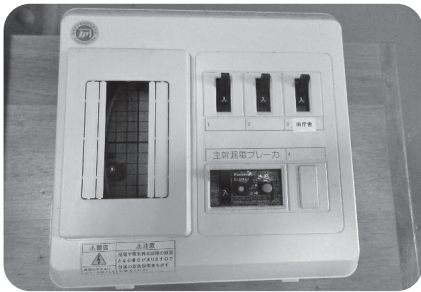
写真⑨（搬入状況）



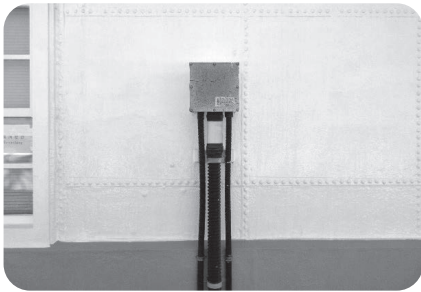
写真⑫（搬入状況）



写真⑪（搬入状況）



写真⑬（霧笛舎分電盤）



写真⑭（霧笛舎電源線）

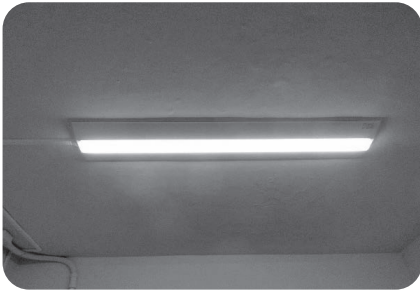
- への電源埋設（写真⑬～⑭参照）
- 照明器具等取付け
- LED照明器具の取付け（写真⑰～⑱参照）
- 壁等モルタル補修
- シャッター周辺の補修（写真⑲～⑳参照）
- 航路標識資料等の固定等
- 90センチメートルビーコン灯器等大型の航路標識資料の固定、展示品整理棚の資料保護措置等（写真⑳～㉑参照）



写真⑯（展示室引き込み）



写真⑰（電源埋設標）



写真⑱（LED照明）



写真⑰（照明スイッチ）



写真⑳（シャッター廻り）



写真⑲（シャッター廻り）



写真㉒（日時計固定）



写真㉑（大型灯器固定）



## 5 「航路標識資料データベース」公開のお知らせ

公益社団法人燈光会では、これまで燈光会ホームページの灯台アーカイブの中で、「近代航路標識資料要覧」を公開しておりましたが、「Adobe Flash Player」のサポート終了に伴い閲覧が出来ない状況となりましたこと、今般、新たに「航路標識資料データベース」として、その内容を一新し、令和4年1月28日から公開しましたので、お知らせいたします。

この「航路標識資料データベース」では、今回整備



写真23 (大型灯器の展示状況)



写真24 (大型レンズ等の展示状況)



写真26 (資料整理棚の展示状況)



写真25 (大型機器等の展示全体)



写真28 (資料整理棚の展示状況)



写真27 (資料整理棚の展示状況)

いたしました犬吠埼灯台航路標識資料展示室の資料をはじめ当会が所有する航路標識機器等の資料を公開していくこととします。

終わりに、今回紹介いたしました事業の取り組みにつきましては、構想段階から約5年を要して完成しましたが、これら歴史的航路標識機器等の資料の整理・保存は、公益社団法人燈光会の重要な使命の一つであると考えております。今後も不断の取り組みとして、当該資料の整理・保存を着実に推進していくとともに、「航路標識データベース」につきましては、継続的に内容を充実・拡大してまいりますので、引き続き、ご支援ご協力をお願いいたします。

航路標識資料データベース

URL : <https://www.tokokai.org/database/>



航路標資料  
(データベースQRコード)



旧犬吠埼航路標識事務所  
(犬吠埼灯台航路標識資料展示室)

新設資料展示室(旧車庫)入口  
(内部写真<sup>23</sup>～<sup>27</sup>参照)



# 初めてのイベント 夕暮れ参観

灯光会御前埼支所長

辻岡知美



御前埼灯台は、令和3年12月25日、1日のみでしたが、参観時間を延長し夕暮れ参観を開催致しました。コロナの影響で灯台ワールドサミットも開催出来ない状況だったので、初めての試みでしたが、夕暮れ参観を企画しました。

内容は、通常の参観時間が16時までのところ、夕暮れが見られる17時30分まで参観時間を延長し、また、参観される方にランタンを

持って灯台へ登ってもらい一味違う灯台を楽しんでもらうことにしました。

当日は、強風の為15時過ぎまでは参観を中止しておりましたが、このまま、夕暮れ参観ができるのか不安もありましたが、中止している間に準備が出来たのは良かったです。風も弱くなり、参観を再開し、夕暮れに迫ってくる頃には、大勢の参観者で賑わいました。結果、大人55名、小人10名程が参観され、先着30組への粗品プレゼントもあつという間に配布が終了しました。

不安でいっぱいでしたが、清水海上保安部交通課・御前崎市観光協会のご協力のもと無事に終えることが出来ました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。今後もイベントは続けていきたいと思えます。来年は、もっともっと、イルミネーション等を増やし、お客様に喜んでもらえるようにしていきます。

ライトアップされた灯台  
とランタンの灯り



観光協会よりLEDのローソクを借り、LEDのローソクを借り、心を作り、Uピン杭に電飾を通して、ハートを2ヶ所作り、上からでも下からでもハートが見えるように工夫してみました。



参観者が持っていたのぼったランタン

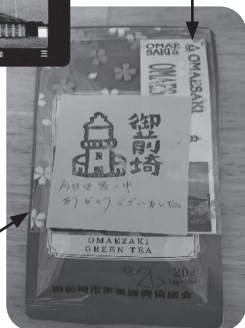


灯台カード

粗品プレゼント  
先着30組限定!!  
当日9時以降にプレゼントの内容の告知をしました。

清水海上保安部 → 灯台カード  
観光協会 → つゆひかりのお茶  
燈光会 → 灯台ステッカー  
以上3点1組をプレゼントしました。

ステッカー



つゆひかりのお茶



水平線に沈む夕日



イルミネーションの設置  
(田辺海上保安部職員の皆様)

一番夕日がきれいな時間にお客様を帰らせてしまうのはもったいない、灯台から夕日を見てもらいたい！という思いで企画した「夕暮れ参観」。

初めての試みというだけでなく、潮岬灯台は特別公開なども少なくイベントも不慣れな中、田辺海上保安部交通課の皆さまのご協力のおかげで令和3年12月18・19日、25・26日の4日間、念願かなって実現することができました。

開催時期が12月ということもあり、灯塔や敷地内に

「夕暮れ参観」

〜灯台から見る夕日とイルミネーション〜

燈光会潮岬支所長 阿部千穂



灯台にのぼって日没を待つ参観者



夕日を眺める参観者の様子



展示室のクリスマスツリー  
(オーナメントは支所長の  
ハンドメイドです)

イルミネーションを設置しキャンドルライトやクリスマスツリーなどでクリスマスムードを演出するなど、夕日が沈んだ後もお客様に楽しんでいただけるように準備を進めました。

期間中、曇り空や潮岬では珍しく雪が降るなどお天気には恵まれず、特に初日の前はものすごい強風でせっかく飾り付けたイルミネーションが吹き飛んでしまわないかヒヤヒヤしました。当日も風が強くと時々空は厚い雲に覆われましたが、SNSでイベントを知った県外の方や写真愛好家の方などが訪れ、普段は見られない灯台からの夕日や、点灯を早めた灯台の光とイルミネーションとの貴重なコラボレーションを楽し

んでいました。また、地域の新聞にイベントの様子を取り上げてもらったので、地元の方々も見慣れているけれどいつもとは違う灯台を一目見ようと足を運んでくれました。今回は初めてということもあり、至らぬ点や準備不足も多々ありましたが、回を重ねることでお客様に喜んでもらえるような良いイベントになるよう、また「潮岬灯台の夕暮れ参観の季節だね！」と楽しみにしてもらえような恒例行事になることを願っております。

最後に、夕暮れ参観実施にあたり、ご支援ご協力いただきました田辺海上保安部の皆さまへ誌面を借りて御礼申し上げます。